

阿部知二「おぼろ夜の話」の生成

——分裂・増殖する〈他者〉との葛藤——

田 中 裕 也

阿部知二「おぼろ夜の話」は昭和二十四年三月に雑誌「新潮」(46―3)に発表され、同年、単行本『黒い影』(一五五頁―二七七頁、昭24・6・25、細川書店)に「おぼろ夜」(以下「おぼろ夜」と改題し収録された。昭和二十三年四月十四日に、京都で起きた殺人事件を素材とした小説である。事件の概要は以下の通りである。《京都大学史学科の学生井元勇は、同大学美学専攻の谷口八重子と知り合ううちに惹かれていき、たび重なる交際の申し込みを行った。ときには谷口宅にまでも押しかけたと言う。しかし井元は交際を断られたあげく、谷口宅に侵入し谷口八重子を殺してしまう。》現在ならばストーカー殺人事件と呼ばれてもおかしくない事件である。しかし井元は谷口殺害の動機を「唯物論と観念論に迷い、救いを八重子との恋愛に求めた」^①や「一瞬間でも喪失した自己の魂を回復し主体性を確立したいと思うにいたった」^②と自己の思想的な苦悩が原

因であると語った。「主体性」という言葉は当時、文学・思想界で流行していた用語であり、世間も井元の事件を「哲学殺人」^③とも呼んでいた。事件については地元紙だけでなく、「朝日新聞」(大阪版・東京版)「週刊朝日」にも取り上げられ、阿部「おぼろ夜」から八ヵ月後には三島由紀夫も「親切な機械」(「風雪」3―10、昭24・11)という小説を発表している。

「おぼろ夜」発表当時の批評としては、伊藤整が「疑いもなく『黒い影』と『おぼろ夜』とはこの作者の最も高い頂点を形成するものである」^④と、阿部がハンセン病と教え子の妻との姦通をテーマとして扱った「黒い影」(「群像」4―2、昭24・2)とともに高い評価をしている。また『小説年鑑Ⅱ』にも再録され、平野謙が同書の「解説」で「おぼろ夜」より「黒い影」の方を収録してもらひたかった。」としつつも、「おぼろ夜」を「力作であり、問題作で

ある。^⑤」としている。このように「黒い影」とともに比較的高い評価をもって迎えられた「おぼろ夜」であるが、これまであまり論じられてこなかった。

「おぼろ夜」についての論考は、管見の限り内倉尚嗣氏^⑥と高場秀樹氏^⑦の二本のみである。二氏ともに三島「親切的な機械」との比較から論じており、「おぼろ夜」単独で論じてはいない。内倉氏は「おぼろ夜」の特徴について「他者の回想録や手記をもとに過去の出来事を再現していくという方法は、阿部知二の戦後作品の一つの特徴でもあるが、ここに事件を客観的に把持しようとする作者の意志を読み取ることが可能」であり、「作者の、人道主義的解釈に則った世代的認識」であるとす。その一方で「親切的な機械」を書いた三島は事件に共感をもって描いたとした。しかし内倉氏の価値付けは、既に伊藤整が「おぼろ夜」の特徴について、「戦後派の作家たちに較べて、客観的批判的であり、我における直接さが弱いということも知れない。しかし阿部氏の中にある良識は、題材の異常性と対立しながら、その比較において、かえって題材の特異性を、それ自体がノーマルに運ぶ社会の必然性によつて批判し、問題を明確にしている。」^⑧と述べていることを、補強しているに過ぎないのではないか。そもそも〈主観／客観〉という対立概念自体に明確な存立の根拠を欠いており、その価値付け自体安易に反転してしまう可能性が

ある。果たして〈客観〉的な事件の把握ということが、この小説の問題だったのか。「おぼろ夜」という小説のタイトルの意味にも言及する必要がある。次に高場氏は、丹念な事件資料の調査から三島「親切的な機械」の登場人物と実際の事件にかかわった人物の対応関係を明らかにした。その上で高場氏は、「おぼろ夜」の作中人物とそのモデルについても言及している。示唆に富む論考であるが、あくまでも「親切的な機械」の考察が主であり、事件資料と小説との偏差については考察の余地が多い。また調査の過程で、高場氏が確認できていない資料があることも分かってきた。本稿では、まず戦後の阿部知二と京都との関わりを跡づけていきながら、「おぼろ夜」生成について論じていく。^⑨その上で阿部が「おぼろ夜」で何を描こうとしたのか考えていきたい。

一 阿部知二と京都

昭和二十年、阿部知二は終戦を、故郷であり疎開先でもある姫路で迎える。つまり阿部は関西にいた訳だが、京都との関わりとしては竹松良明氏作成の「阿部知二年譜」^⑩が、終戦直後の昭和二十年から「約二年間同志社大学に出講」と記す。しかし姫路文学館発行の図録「抒情と行動——昭和の作家阿部知二」の「年譜」には、昭和二十年「4月（推定）、同志社大学客員教授となる（〜24年）年4

「回出講 英文学・小説総論担当」^⑪と書かれている。竹松氏は阿部の出講期間を「約二年」と含みを持たせているにしても、図録では出講期間は四年間とされており、その期間には明らかな開きがある。そこで今回、同志社大学今出川図書館に所蔵されている『同志社職員録』（以下『職員録』）の閲覧を許されたので、阿部と同志社大学との関わりを報告したい。戦後の『職員録』は昭和二十一年に作成された後、間があいて昭和二十四年以降、毎年作成されている。昭和二十年代の『職員録』は紙型も定まっておらず、すべて手書きであるが、氏名・職分・住所・担当授業などが記されている。『職員録』の大半は、奥付もなく明確に作成した日付が記されていないが、表紙に「五月作成」と記されていることが多い。『職員録』を確認していくと、昭和二十一年、二十四年、二十六年から三十一年まで客員教授として、阿部知二の氏名と姫路市坊主町の住所が記されている。また講義としては「小説総論」を担当していたことが、昭和二十四年『職員録』に記されている。さらに昭和二十四年から出版され始めた『京都年鑑』の「昭和二十五年版」―「昭和二十九年版」（昭24・11・25／昭28・11・30、都新聞社）まで、同志社大学の教員の欄に阿部の名前が確認できる。このようにどの資料も期間が異なり、阿部が勤めていた期間を確定することは相当困難である。

ただし、竹松氏「阿部知二年譜」によると、阿部は、昭和二十五

年の八月に「イギリスのエディンバラ大学で開催された第二十二回国際ペンクラブ大会に、日本代表として参加」し、同年「十一月十七日に帰国、世田谷区世田谷二丁目一三六七番地の新居に入る」^⑫のである。昭和二十五年は海外渡航と関東移住という、阿部にとって移動の多い時期であった。以降、阿部は関東に居を定める。この時期と重なって、昭和二十一年度、二十四年度『同志社大学職員録』には記されていた、阿部の名が二十五年度には確認できない。しかし二十六年以降には、再び阿部の名前が記されている。先に引用した図録の「年譜」に「年四回出講」とあるように、この時代の客員の教員はそれほど講義数を求められてはいなかったようである。つまり客員教授の職がそれほど負担とならなかったため、多忙であった昭和二十五年を除き、阿部は同志社大学での講義を続けていたのではないか。だとすると阿部は四年以上講義を受け持っていた可能性もある。もちろん客員教授の籍だけ残しておいて、講義をもっていないかったということも考えられる。しかし昭和二十四年度の『職員録』に授業名まで記されていることから、最低でも四年間は講義を受け持っていたと言える。つまり殺人事件が起こった昭和二十三年当時、間違いなく阿部は同志社大学で教壇に立っており、京都を訪れていたと考えられる。阿部は、多くのメディアが取り上げた、井元の殺人事件を調べる機会に恵まれていた。

ここで「おぼろ夜」を顧みると、「私」はこの小説の作者であり、「私」阿部と考へたくなる。しかし「私は久しぶりに京都に行つてみた。」のであり、事件についても「詳しい事情も知ら」ず、偶然にもその詳細を聞いたのである。このように「私」と阿部の立場は異なる。では他の事件の登場人物の描かれかたはどうだろうか。次章以降で詳しく検討していく。

二 能代のモデルについて

まず「おぼろ夜」のあらすじから見ていくことにしたい。《「私」は、やや年下の友人であり二つの学校で西洋史を教えている能代に会いに、久しぶりに京都を訪れる。「私」は小料理屋で暗い面持ちをしている能代と学生の保津と会い一年前の殺人事件を聞き、そして能代から事件当時の新聞の切り抜きや石狩の手記をしたことから小説を書くことを決意する。——昨年の正月、能代は千曲華江の姉である百合江から、妹が自分の教え子である石狩に付け狙われていることを告げられる。能代は石狩の友人でもある保津と共に、再三石狩に華江に近づくなと注意するのだが、石狩は分裂した「思想」を振りかざすばかりであった。結局、石狩は「精神的負担」を加える華江を殺害すべきだという結論に至り、華江を殺害する。石狩は裁判でも矛盾した思想を述べるばかりであった——能代は石狩

の論理矛盾を一種の精神分裂として、「われわれ現代のものは、みんなそうではないか。」と感じ、更けてゆく春のおぼろ夜に石狩を救えなかつた苦悩を語る。》

「おぼろ夜」の登場人物とモデルとの関係については、先に述べたように高場秀樹氏が事件資料の調査結果から、石狩雪彦¹³井元勇、千曲華江¹⁴谷口八重子、千曲百合江¹⁵創作か、能代¹⁶井上智勇、保津清一¹⁷猪俣勉であると示した。モデルについて、高場氏の意見に多くの異論を持たないが、その中で石狩と対峙する中心的な人物である能代について、新たに分かったことがあるので付け加えたい。

「おぼろ夜」の能代は「やや年下の友人で二つの学校で西洋史を教えて」おり「柔道何段かの」「武骨」な人物として描かれている。モデルの井上智勇については『現代人名情報事典』¹⁸に拠ると、井上は、兵庫県出身で明治三十九年五月二十六日生まれの西洋古典古代史学者であり、昭和十年から京都大学の講師を務め、昭和二十二年に同大学で教授に昇任している。阿部は明治三十六年六月二十六日生まれであり、小説と同じく現実でも井上は阿部より年少である。阿部と井上に関わりはあったのだろうか。

井上智勇については「関西人気教授の横顔(四)」に「氏は姫路中学、姫路高校を経て、昭和五年京大卒¹⁹」と経歴が書かれている。阿部も姫路中学出身である。当時の中学は五年制であり、井上は阿部より

三年年下であるから阿部が姫路中学に在学していた時期と重なる。

親しい間柄であったかは現在のところ不明だが、阿部と井上は知り合いであった可能性は高く、井上から事件の詳細を聞き出したのかも知れない。また『京都年鑑』『昭和二十五年版』に拠ると、井上は京都大学以外に龍谷大学でも講師を勤めていた。「おぼろ夜」の能代も二つの学校で教鞭をとっていることが描かれている。さらに井上が第二回の公判で「井元が谷口を殺すといっているのを聞いてから私はその非をさとし」（『極力なだめたが／当時を語る井上教授』「京都市日新聞」第二面、昭23・7・4）たと述べているが、「おぼろ夜」の能代も積極的に石狩と関わり、その殺意を諫めようとしている。このように経歴や事件に対する姿勢から井上と能代は重なる。しかし能代と猪狩との対話で、井上に関する資料からは確認できないものも多い。「おぼろ夜」の次の場面を見ていきたい。

石狩の目は、その華江の方に集中されたかとおもうと、見る見る、彼の顔が狂悪な憎悪にかがやき、目の色が真青に変つた。左手をよごれたジャムパアのポケットにねじこんで動かした。

ふしぎな直覚で、「短刀」ということが、能代の心にひらめいた。（略）能代が柔道のおぼえて、左利きと知つたその腕をねじり、押えつけようとしたが、石狩は逆に突撃してきて、しただか二人は本棚にぶつかつた。（略）能代は、白鞘の短刀を

取り上げた。（略）

「この短刀だけを取るのがぼくの目的ではなかつた。これが表す観念も君から奪いたかつたのだ。元氣を出して、衝動を押えてくれないか。」（傍線論者、以下同）

石狩が千曲華江に危害を加えるための短刀を隠し持っていたことに能代が気付き、石狩から短刀を取り上げる場面である。この場面は、井上に関する資料では確認できない。しかし、「井元の行動に心配した学校当局では本年二月ごろ角南京大補導課事務官、西洋史担当井上智勇助教授らが同君の反省を促していた」（『毎日新聞』大阪版、第二面、昭23・4・15）という記事がある。実は井元の行動に対応していたのは井上だけでなく、京都大学補導課事務官として勤めていた角南正志という人物もいたのである。しかも角南は、自身で井元の短刀を取り上げたことを語っている。

時折押えきれなくなつたように恐ろしい視線を谷口君にむける彼（論者注―井元）が、左ポケットに短刀をかくしていることに私は気づいた。彼は左利きで腕力は強い。その短刀だけではない、短刀に表わされている観念をすてる意味だと私がいうと、彼は長い間考えぬいたあげく決心しようにしてその短刀を差出したのである。（角南正志「井元君のことども」『自由文化』12、昭23・9）

角南は井元が短刀をポケットに隠しており、しかも左利きであると気付いている点などが「おぼろ夜」と重なる。つまり、角南に起こった出来事も能代に用いていると言える。ただし角南は短刀を取り上げるために言葉で説得したが、「おぼろ夜」の能代は「柔道のおぼろ夜」で、左利きと知ったその腕をねじり、「石狩の短刀を取り上げる」というように変更されている。この変更は作品としてより劇的な場面にし、石狩を諷める能代を理性的な人物としてだけでなく勇敢で英雄的な人物に設定したと言える。阿部がモデル二人を一人の登場人物に用いているのは、石狩より年長の者で石狩の行動を止めようとする人物が二人いると話が分散してしまうことを恐れ、小説の構成を重んじたためだと考えられる。このように阿部は資料の引用から能代の人物造型を行っているが、石狩と対峙する人物として、意図的な変更をしているのである。

三 石狩の描かれ方

千曲華江を殺害した石狩幸彦のモデル、井元勇に関する記事と小説とを比較していく。「おぼろ夜」で石狩は、自らの手記をしばしば能代や友人の保津に対して披露している。

郷里の家から、石狩は能代にあてて、手記をおくつてきた。

(略)／……おれの手記にも、その実、多分の虚偽と修飾とが

存ずるかも知れぬ。／……一切を拒否し、嘲弄し去らんとするニヒリストの態度とは、大いに隔りがあるかも知れぬし、真のニヒリストならば一切を空に、秘密の中に葬り去り、他人の毀誉褒貶を何等意に介しないであろうし、凡てを空と観じて、自然の流に任せるとも考えられる。(略)

「おぼろ夜」と同じく、実際の事件の加害者である井元勇も手記を残している。先行研究の高場氏も既に指摘しているが、手記は「京都日日新聞」が独占で入手し、井元の日記を掲載している。先に引用した「おぼろ夜」と共通する箇所を、次に比較してみる。

一月二十三日 (略)／▼一切を否定し嘲弄し去らんとするニヒリストの態度とは大いに隔りがあるかも知れぬし、真のニヒリストなら一切を空に、秘密の中に葬り去り、他の毀誉褒貶を何等意に介しないであらう (「果てしなき虚無への道」女京大生殺しⅡ井元勇の日記)「京都日日新聞」夕刊、第二面、昭三・四・二二)

確かに内容、文章ともに多くの点で重なる。ただし些細な箇所だが、重ならない表現や表記が確認できる。先に引用した文章を比較すると、「おぼろ夜」の手記では「一切を拒否し」と書かれている箇所が、新聞記事では「一切を否定し」と書かれており微妙に表現が異なる。また「おぼろ夜」で「隔り」と書かれているものが、

「京都日日新聞」では「距り」と記されている。さらに「おぼろ夜」で「凡てを空と観じて、自然の流に任せるとも考えられる。」という文章も、新聞で掲載された手記では確認できないのである。そもそも「京都日日新聞」に掲載された井元の手記は、紙面のため分量の制限があり、抄録のかたちをとっている。調査の過程で、井元の手記を全文掲載している資料が存在することが分かった。その資料は「愛」という雑誌で、同じく京都日日新聞社が発行しているものである。「京都日日新聞」の資料から引用した箇所と、対応する場面を見てみたい。

一月二十三日（略）／一切を拒否し 嘲弄し去らんするニヒリストの態度とは大いに隔りがあるかも知れぬし 真のニヒリストなら一切を空に 秘密の中に葬り去り 他のキ譽褒貶を何等介しないであらうし 亦凡てを空と観じたら 敢て其の結末を明白に一線を劃す可き死を撰ばず 自然の流に任せるとも考へられる（殺人京大生の「悲恋日記」「愛」2、昭23・7）

雑誌「愛」で掲載された井元の手記を見ると「一切を拒否し」や「隔り」という表記が「おぼろ夜」と重なる。また「京都日日新聞」にはなかった文章が、「愛」では確認できる。「凡てを空と観じたら」や「自然の流に任せるとも考へられる」という「愛」のみで引用されている井元の文章が、先ほど見た「おぼろ夜」の「凡てを空

と観じて、自然の流に任せるとも考えられる。」と重なる。つまり阿部は「京都日日新聞」で掲載された手記ではなく、雑誌「愛」に掲載された手記を引用したのである。しかも「おぼろ夜」では、井元の手記を石狩の手記としてそのまま引用しているだけでなく、石狩の会話文にまで用いているのである。ここまで阿部が井元の手記をどのように使っているかを見てきた。では井元の手記で用いられていない箇所はどのような部分であるのか、見ていきたい。

まずは「おぼろ夜」での石狩の手記に「然し俺の人間の弱さ。苦悩悲哀を積極的に打開する気魄に欠けているのであろうか。／觀念論に唯物論に將亦虚無主義に徹し得ぬままに、更に自己に忠実ならんとして、しかもその亦中途半端に陥りかかる道を余儀なくされたのだ。（以下略）」と、思想の苦悩から千曲華江を殺害しようと思いつる過程が描かれる。実際の手記では、「一月三十日／然し俺の人間の弱さ、苦悩悲哀を積極的に打開する気魄に欠けてゐたればこそ最も安易な匡救法解決法として easy song な死を撰ばんとした事は、今更贅言を要しない、／觀念論に唯物論に將亦虚無主義に徹し得ぬ儘に更に自己に忠実ならんとして而も其亦中途半端に陥りかかる道を余儀なくされたのだ。」（前掲「殺人京大生の「悲恋日記」」に同じ）と記されている。ほとんどそのまま小説に引用されているが、傍線部の苦悩から井元が自死を選ぼうとした箇所が、「おぼろ

夜」で引用されていない。また先に引用した井元の手記で一月二十三日の箇所にも「敢て其の結末を明白に一線を劃す可き死を撰ばず」「俺の死に対しても」「自殺者の手記」と言った、自死を連想させる言葉があったのだが、「おぼろ夜」では引用されていない。能代によって、石狩の手記には「ところどころに」「自殺」について書かれている、と説明されるだけである。阿部は意図的に井元が自殺を考えた内容を箇所を省いていることが分かる。何故、石狩が自殺を考える内容の文章を直接用いなかったのだろうか。前章で引用した、能代が石狩の短刀を取り上げる場面の少し前に、能代と石狩が論争する場面がある。

〔略〕聞いてみるが、君はその恋愛の悲しみの中で、自分の生命を断ちたいような思いになった時は一度もないというのかい。」

「自殺などは考えたことはありません。」〔略〕

「君はまるで思い上つてしまっている。(略)だが、狂犬の主体をみとめるといふのだ……」

「狂犬……」石狩はうめくようにいつて、机の上で頭を両手で抱えた。

能代は、石狩の華江を殺害しようという心境を改めさせるために、むしろ恋愛の苦悩の中で自死を考えたことはないのかと問いたです。

しかし石狩が頑なに自殺など考えたこともないと応えると、能代は感情的に石狩に対して「狂犬」と罵ってしまうのである。すると石狩は「頭を両手で抱え」て「泣き出した」のである。つまり石狩が弱い自己を隠す存在として強調されるために、阿部は井元の手記から自殺を連想させる部分を削除したのである。また石狩を自己の苦悩のためなら人を殺すのも厭わない、自分勝手な人物として描くためだとも言える。この能代と石狩が論争する箇所は、前章で紹介した角南の記事からはそのまま引用されたものであるが、角南は井元に対して「実に思いあがつている」とは言っているものの「狂犬」とまで暴言は吐いていない。しかも作中で能代は石狩の手記や発言に対して、理解を示そうとするが「何を表明しようとしているか分からぬ」や「何の思想を明示しているものではなく」と感想を漏らしている。さらに能代は石狩に謙虚さが欠けていると見ると、「狂犬」と罵ってしまい、二人は対話の可能性を失ってしまうのである。

ここまででは能代と石狩の描かれかたを、事件資料と比較してきた。多くを事件資料に拠っているが、能代と石狩の対立的な構図を明確化するための操作をしていることも看取できた。次章では、阿部が事件資料以外で用いた素材に注目し、何を描こうとしたのかを探ってみたい。

四 おぼろげな（他者）

作中の登場人物とモデルとの関係では見えてこない部分に焦点を当てていく。能代が石狩の千曲殺害の論理を突き崩すために、「シュヴァイツァー」の言葉を引用する場面がある。それは能代が石狩の千曲殺害の思想に歯止めを掛けるために、「……人間をふたたび考へる蘆に立ち返らしむる、ということとはすなわち、かれらに自分の思惟を再発見させる、ということに他ならぬ。『生への畏敬』の上に立つ思想の中にこそ、思想の根本的更新がある。」と、素朴な思考と他者の生命とを尊重する「シュヴァイツァーの自伝」を引用する。しかし事件関連の資料からは「シュヴァイツァー」に関する言葉は確認できない。また「おぼろげ夜」の「付記」には、事件資料の文献紹介は無いが、「文中のシュヴァイツァーの言葉は竹山道雄氏の訳によりました。」と記される。「シュヴァイツァー」の書物についても具体的な書名が記されていないが、わざわざ断りをいれていることを考えれば、阿部が事件資料とは関係なく引用したと見るのが正しいだろう。調査の結果、竹山道雄訳『わが生活と思想より―アルベルト・シュヴァイツェル自叙伝―』の「エピソード」（二八九頁〜三二二頁、昭14・2・6、白水社）に拠ったことが判明した。「おぼろげ夜」との対応箇所には「人間をふたたび考へる輩に立ち返らしむる、といふことは、すなはちかれらに自分の思惟を再発見させる、といふことに他ならぬ。（略）『生への畏敬』の上に立つ思想の中にこそ、思想の根本的更新がある。」とあり、旧仮名遣いや読点を改めていること以外は全て重なっている。間違いなくこの書物から引用したと言える。

アルベルト・シュヴァイツァーと言えばドイツ出身の神学・哲学者・医者という異色の人物で、生涯アフリカ住民への医療にさざげ「密林の聖者」とも呼ばれている。昭和二十七年ノーベル平和賞受賞。ただ現在ではシュヴァイツァーが有色人種のことを理解しておらず「思いついた植民地主義的な温情主義者」と批判されることもあるが、第二次世界大戦下から戦後の時期はシュヴァイツァーの著作が邦訳された時期であり、彼の人道的な点が強調されることが多い。「生への畏敬」とは「この世界に生きる人間は、多くの生命に取壊された一箇の生命で」あり「自己の生命と他の生命とを愛によつて一と」（前掲『わが生活と思想より』に同じ）考え、自己と共に他者を尊重する思想である。

周知のとおり阿部の小説テーマの一つに、〈ヒューマニズム〉がある。水上勲氏が阿部の「ヒューマニズム論は、現代人をおびやかす意識の分裂や不安をいかに具体的にのりこえていくかという、きわめて実践的な性格を持っていた。」¹⁷とする。「おぼろげ夜」でも「精

神分裂といえば、われわれ現代のものは、みんなそうではないか。」と能代に述べさせており、さらに思想の分裂に苦しむ石狩に対して、素朴な思考・他者の生命を尊重するシュヴァイツァーの思想を勧める能代は、阿部の思想を体現したキャラクターであると言える。

しかし、そのシュヴァイツァーの思想を援用し、千曲を殺さないよう石狩を説得しようとする能代だが、石狩は「思想が応用問題であるかぎり、ぼくは承服することはできません。」として、千曲被害の論理を語りだす。こうした対話の失敗も能代が「狂犬」と石狩に罵つてしまう要因の一つとなる。つまり能代の説得は石狩には届かないのである。しかも伝聞形式ではあるが、能代の論理は石狩から「古い世代の人道主義」とまで言われてしまったあげく、千曲華江まで殺害されてしまうのである。このように能代の人道主義的な思考が石狩によって、徹底的に無効化されてしまい、能代は「現代の青年の相手になる力はない」と感じるに至るのである。

そして作中の石狩は、実際の事件で谷口を殺害した井元と同じく、逮捕され五回の公判の後、十二年の刑に服することになる。ここまでは一年前の事件の回想として、一旦結末を迎える。小説は再び事件の一年後の現在時に戻る。そこで能代、「私」、保津によって、石狩が罪を犯した新たな理由が招来されてしまう。保津は、「石狩の場合には、(略)生まれ落ちるとから身にしみこんだ。(略)孔子孟教

育、——寝起や食事まで規則づくめだつたそれとか、勤労奉仕とか、重庄はつまかさなつており、そこへもつてきて戦争でした。他人の何倍の重庄です。千曲は、そういう一切合財のものの象徴だつた」と、太平洋戦争や戦前の伝統的な教育が石狩の重庄になつており、被害者である千曲がその象徴であつたと論じる。また「私」は「いわば素手のままで飛びこんできてぶつかつた学問、というやつも、その石狩を、悪い酒のように酔わせ、そしておさえつけてしまつたんだな。」(傍点原文)と、戦後の新しい学問も石狩に悪影響を与えたのだと解釈する。つまり石狩は、戦前の伝統的な教育と新しい思想との間で、自己を引き裂かれた人物として回収されていく。さらには能代も「この京都というところにも、一種の圧迫力があるんじゃないか。京都といつて悪ければ、世界中のどの古い文明の都、といつてもいい。ひよつとするとそれを、美しく、伶俐で、練れて、やわらかで、なまめいて、冷くて、とらえどころもない女たちが、象徴しているんだろう。」と、文化という捉えどころのないものが石狩を苦しめ、やはりその象徴が女々千曲であつたとする。このように彼等は自己の観点から、石狩の行動を論理付けようとするたびに、新たな理由を招来してしまふ。つまり彼等にとつて理解できない石狩という(他者)の犯罪を説明するために、戦争、学問、文化、女性というさらなる捉えがたい概念的な(他者)を呼び出してしま

うのである。しかもそれらの〈他者〉について彼等が言うには、石狩に「重圧」「おさえつけ」「一種の圧迫力」という目に見えない心的な負担を課していたとする。しかし三人は石狩の犯罪の理由を新たに意味づけていこうとするが、結局は捉えがたい不明確な要素であり、彼等の心は晴れない。保津は、

「ぼくたち、——ぼくと能代先生とは、あの石狩を愛していたんじゃないでしょうか。今も愛しているんじゃないでしょうか。それでなければ、あのころのぼくたちの行動、それからあの男が今もこうして頭にこびりついていることが、説明できませんよ——殺人者を愛するなんて、有りうることなんだろうか。(略)」

と述べる。これに対して能代は

「石狩を愛することと殺人とは別だ。殺人の悪さは、常人には測り知れぬほど、それほどケタ外れのものだ。ものすごい振動の音波が人間の耳にきこえぬようなものだ。その地獄的な恐怖を身に沁みて分り知っているのは、殺した本人——いま牢屋で、寝ているか夢をみているか眼をさまして思弁しているか呻いているか知らぬが、——あの石狩自身だ。」

と述べるのである。この二人の会話は〈他者〉理解の、二つのありようを示しており、興味深い。保津の言うように、石狩の事件に悩

まされ、新たに理由付けするたびに〈他者〉を理解しようとする行動は、〈他者〉を愛する行動と共通する。しかし保津は石狩が殺人を犯した理由が掴めず、不安に苛まれる。一方、能代は犯罪自体を圧倒的な〈他者〉として置き、自身の常識の枠外に置こうとするのである。これは殺人の論理を振りかざす石狩に対して「狂犬」という人間／非人間という対立図式を設定してしまったことと同じように、殺人という出来事を石狩という人間の〈他者〉として排除していくのである。しかしそれでは石狩自体を理解したことにならないのではないか。結局、能代も石狩を捉えきれず、石狩の姿を

「忘却の底から」思い出しては、「憂鬱」に感じてしまう。このように能代、保津、「私」は石狩の犯罪を通して、明確には捉えられないものを感じるものであり、「おぼろ夜」はまさしく、おぼろげな把握できない出来事を把握しようとして、幾度も再生産させ続ける物語なのである。これは広村の妻と姦通することで、ハンセン病と妻への妄執を抱えながら死んだ広村の「黒い影」に悩まされ続ける、今里辰作の姿にも重なるだろう。ただし今里は自ら犯した罪で「黒い影」に悩まされるのであり、極端に言えば能代たちとは対置的な人物であるとも言える。つまり「おぼろ夜」と「黒い影」とは〈他者〉をめぐる問題を、逆の立場から扱った作品なのである。この時期の阿部は〈ヒューマニズム〉という倫理的なものを信じながらも、

そこに留まり続けることの不可能性を充分理解していたのではないか。「おぼろ夜」は、捉えがたい〈他者〉との関わりとその葛藤を描いた作品なのである。

注

- ① 「共学の門」に恋の刃」（朝日新聞）東京版、第二面、昭23・4・15）
 ② 「女京大生を殺す」（毎日新聞）大阪版、第二面、昭23・4・15）
 ③ 牧「呪いの哲学」（愛）2、昭23・7）
 ④ 伊藤整「黒い影」について」（東京日日新聞）夕刊、第二面、昭24・7・22）
 ⑤ 平野謙「解説」（『小説年鑑Ⅱ』三〇九頁〜三二二頁、昭24・8・25、八雲書店）
 ⑥ 内倉尚嗣「事件から小説へ―「おぼろ夜の話」と「親切な機械」―」（『阿部知二研究』4、平9・4）
 ⑦ 高場秀樹「三島由紀夫「親切な機械」論―素材からのアプローチ」（『京都語文』9、平14・10）
 ⑧ 注④に同じ。
 ⑨ 三島由紀夫「親切な機械」については、拙稿「三島由紀夫「親切な機械」の生成―三島由紀夫とニーチェ哲学―」（『日本近代文学』84、平23・5）で論じたため、割愛した。
 ⑩ 竹松良明「阿部知二 道は晴れてあり」（『阿部知二年譜』（二二五頁〜二三一頁、平5・11・20、神戸新聞総合出版センター）
 ⑪ 姫路文学館編『抒情と行動―昭和の作家阿部知二「年譜」（九〇頁〜九三頁、平5・9・14、姫路文学館）
 ⑫ 注⑩に同じ。

⑬ 高場氏は主として事件関係者の資料を扱っているため、「私」のモデルについては言及していない。

⑭ 平凡社教育産業センター編『現代人名情報事典』（二〇七頁、昭62・8・25、平凡社）

⑮ 葱村安「関西人気教授の横顔四」（『自由文化』13、昭23・10）

⑯ 金子昭『シユヴァイツァーその倫理的・神祕主義の構造と展開』（平7・2・25、白馬社）

⑰ 水上勲「阿部知二覚え書き四」（『帝塚山大学紀要』20、昭58・12）

※本稿で引用した阿部知二の文章は、『阿部知二全集』全十三巻（昭49・7・30〜昭50・7・15、河出書房）を底本とした。また引用に際しては、ルビを簡略化し、原則として漢字は新字体に改めた。